



## 五 逃げろや、逃げろの大レース

---

「みんな、逃げよう」

健太の声で三人はらせん状の階段を必死で上って行く。

「ガブ」「ガブ」

三人の頭の上で大きな音がした。見上げると、ジャンプしたライオンとトラがお互いの頭にかぶりついていた。

「ライオンとトラが合体しているよ」

「ライオントラね。新しい動物よ」

「へえ。ここではいろんな夢が見られるんだ」

「もっとたくさんの夢が見たいわ」

洋介と優子ちゃんは口をぽかんと開けて、ライオントラを眺めている。

「感心している場合じゃないよ。早く逃げよう」

健太が二人を促し、三人は息を切らしながら、階段を駆け上る。その後を、ライオントラを先頭に、キリンやゾウなど、動物たちが追い掛けてくる。一番後ろでは、「あいつらを捕まえろ」とリーダーが声を枯らして叫んでいた。

三人の視線に広いフロアーが見えた。二階では、クジラやイルカ、マグロにアジ、タコやイカなどが空中をゆったりと泳いでいる。まさに、水族館だ。

「お前たち。のんびり泳いでいないで、そいつらを捕まえろ」

リーダーがクジラたちに向かって命令する。その声を聞いて、タコとイカが先頭で、まっ黒い墨を吐きながら健太たちに突撃してくる。

「ここも駄目だ。逃げろ。逃げろ」

三人は更に上を目指してらせん階段を走り上る。

「シュルシュルシュル」

何かが伸びてくる音がする。

「みんな。しゃがむんだ」

健太の掛け声で、三人は斜めになって階段に手を着く。健太たちの頭の上を茶色と白の触手が伸びて、空を切った。後ろを振り向くと、タコとイカが互いの足を絡み合わせて、だんご状になって階段を転がり落ちていく。

「足が十八本になっているよ」

「あれはタコイカよ。また、新たな魚に出会えたわ」

「ゆっくり観賞している暇はないよ。さあ、逃げよう」

三人は更に上を目指す。

「何を遊んでいるんだ。もたもたしないで、さっさと、あいつらを捕まえろ」

リーダーは夢たちのあまりの不甲斐なさに、頭のとっぺんがとげとげになるくらいに怒りが頂点に達しようとしていた。健太たちの背中の後ろには、タコイカなどの魚たち、ライオントラなどの動物たち、その後をリーダーが続いていた。

健太たちは三階フロアーに到着した。三階では大勢の警察や消防士たちが見回りやいざという時に備えて訓練に励んでいた。

「よし。お前たちなら何とかなるはずだ。訓練はもういいから、そいつらを捕まえろ。日頃の訓練の成果を見せてくれ」

リーダーが期待を込めて、健太たちを指さす。警察官や消防士たちはリーダーの号令の下、一斉に健太たちに向かってきた。

「待て。待たないと撃つぞ」

「待て。待たないと水をかけるぞ」

警察官や消防士たちが口々に威嚇の声を発する。その声が終わるや否や、バーンという発射音とジャーという放水音が鳴り響いた。

「みんな、分かれるんだ」

健太の声で、それまで固まっていた三人は階段の右端、真ん中、左端と、ばらばらに散った。健太や洋介、優子ちゃんのそれぞれの脇腹の横を拳銃の弾とホースからの水がひゅっという音を立てて、通過した。そして前方の踊り場の壁にぶち当たった。

「みんな、伏せるんだ」

咄嗟に、健太が叫ぶ。

「わー。助けてくれ」

背中の中から大声がした。振り返ると、警察官や消防士たちは全身水浸しで、床に転がっていた。制服は脱げ、互いに入れ変わっていた。

「警察消防士だ」

「警察も消防もできるなんて、いざという時、みんなのために役立ちそうね」

「それこそ、感心している場合じゃないよ」

健太たちは警察消防士を後に残して、塔を更に上へと登って行く。

「何、寝転がっているんだ。お前たちの日ごろの訓練は何だったんだ。さっさと起き上がって、あいつらを追い掛けるんだ」

リーダーのあきれ果てた声に、警察消防士は急いで立ち上がると、健太たちの背中を追う。その後ろに、タコイカ、ライオントラなどが続き、最後尾ではリーダーが白い顔を怒りで赤く染めて「行け、行け」と叫んでいる。

四階では野球選手、サッカー選手などのスポーツ選手たちが試合に備えて、素振りやリフティン

グなど、トレーニングに励んでいた。

「トレーニングは中止だ。おまえたちも協力しろ」

リーダーの怒鳴り声で、野球選手たちは硬式球を握りしめバットを振り回しながら、サッカー選手たちはサッカーボールをドリブルしながら三人に迫ってくる。

「みんな、飛び上がるんだ」

健太たちは天井に届くくらいジャンプした。ノックされた野球の硬式球が、キックされたサッカーボールが、三人の足元をすり抜けた。ボールは壁に当たると、三人に目掛けて、跳ね返ってくる。再び、回転する縄跳びの縄を飛ぶように「せえの」と掛け声で飛び越す三人。

跳ね返った野球のボールはサッカー選手の手へ、サッカーボールは野球選手のグラブにすっぽりと入った。どうしたらよいのかと。互いに顔を見合わせ、とまどう選手たち。やがて、決心したのか、サッカー選手たちは野球の硬式球をサッカーゴールに投げ入れ、野球選手たちはバットでサッカーボールをグラウンドに向かって打ち放った。

「へえ、すごいや。新しいスポーツの野球サッカーの発明だ。オリンピックの公式競技になるのは間違いないぞ」

三人の感心した言葉に、野球選手たちとサッカー選手たちは互いに顔を見つめて頭を掻いて照れる。その隙に、健太たちは更に上の階を目指す。

「敵に誉められて、喜んでいる奴がいるか。ぐずぐずしないで、あいつらを捕まえろ」

リーダーはがくっと首を傾けながらも、気を取り直して命令する。その言葉で、野球サッカー選手、警察消防士、タコイカ、ライオントラなどが三人を追いかけ、一番後ろでは「捕まえろ、捕まえろ」とリーダーが既に枯れ果てた声で叫び続けていた。

五階には医者や看護師たちが、診察は始まる時間に向けて、聴診器や消毒液などの点検をしていた。

「そいつらは患者じゃない。それに、保険証を持っていないぞ。不法侵入者だ」

リーダーの声に、白衣の天使たちが注射器や体温計、血圧計などを持ったまま、大の字になって立ちふさがる。そこには隙間はない。これでは前には進めない。

「健太。どうする？」

「もう。だめだわ」

洋介と優子ちゃんが顔を見合わせて、立ち止まった。

「大丈夫。今から、野球の盗塁だ」

三人は足も大の字の白衣の天使たちの股の間に向かって滑り込んでいく。咄嗟のことで、天使たちは慌ててしまい、お互いの体温や血圧を測り合う。

「医者も看護師も一心同体なんだ。白衣の天使たちなんだ」

健太たちの言葉に医師も白衣の天使たちも、よくぞ言ってくれたとばかりに大きく頷いた。その隙に、三人は階段を駆け上っていく。

「当たり前のことを言われて、今更、何を納得しているんだ。そんなことよりも、あいつらをさっさと捕まえろ」

リーダーの諭すような声で、白衣の天使たちは我に返り、健太たちを追いかけ始める。

健太たちの後ろには、白衣の天使、野球サッカー選手、警察消防士、タコイカ、ライオントラなどが追いかけて、一番後ろには白い顔に顔面に太陽を引っ付けたようなリーダーがいた。

健太たちはようやく六階にたどり着いた。六階では、何十人ものアイドルたちが次回のコンサートに備えて、歌ったり、踊ったりと練習をしていた。

「そんな練習なんか後でいい。そいつらを捕まえろ、捕まえた奴が次のコンサートではセンター役だ」

リーダーが目の前に人參ならぬ、アメをぶらつかせる。

センターを取れると聞いて、アイドルたちは練習をそっち抜けで、自分こそが捕まえるんだと我先に通せんぼをする。先頭には見知った顔がいた。

「あれ、優子ちゃんじゃないか」

洋介がおそるおそる指を指した。

「あたしなら、ここにいるわ」

優子ちゃんが不満そうに叫ぶ。

「多分、盗まれた優子ちゃんの夢だよ」

健太が腕を組んで、断言する。

「あたし、思い出した。あたしの夢はアイドルになることだわ」

優子ちゃんは顎に手を当てて、何度も頷いている。

「へえ。優子ちゃんも可愛いけれど、アイドルたちもやっぱり可愛いね」

これまで緊張していた洋介の顔が、春が訪れたかのようにほころんだ。

「洋介君。何、にやついているのよ。彼女たちに捕まったら、ここから抜け出せなくなるのよ」

優子ちゃんが洋介をにらみつける。

「俺、それでもいいかも」

洋介の鼻の下は六階までの階段ぐらいの長さに伸びきった。

「洋介のバカ。目を覚ましなさい」

優子ちゃんは洋介の頬を引っぱたく。

「いて・・・」

洋介は優子ちゃんに叩かれた頬を思わず撫でる。

「でも、こんなに大勢に通せんぼされたら前には進めないな。四十八人以上はいるよ」

冷静な健太が現状を分析する。

「大丈夫。あたしに任せて」

優子ちゃんが手拍子を打ち始めた。

「いち、に、さん。いち、に、さん」

優子ちゃんの手拍子に合わせて、アイドルたちがステップを踏み始めた。そして、ラインダンスのように一列に横に並んでいたアイドルたちがいくつかの輪になって踊りだす。すると、フロアの真ん中に、誰の実行支配でもない空白地帯が生まれた。

「今のうちよ」

優子ちゃんはぺろりと舌を出した。もちろん、舌は二枚じゃなく、一枚だった。三人は踊ることに没頭しているアイドルたちの間を難なくすり抜けた。

「お前たちは、何で踊っているんだ。他人を躍らす自分たちが、反対に、敵に踊らされてどうするんだ。練習は後でいいと言っただろう。早く、追いかける」

リーダーのセクハラやパワハラにならないような大声で、アイドルたちは「キャー、待って」と、内股で、サインをねだるファンのように三人の背中を追い掛け。

「やるねえ。優子ちゃん。尊敬するよ」

洋介が逃げながらも優子ちゃんの顔を見つめる。

「アイドルになりたいあたしだから、アイドルたちの気持ちがよくわかるのよ」

優子ちゃんはさり気なく呟く。健太たちの後ろには、アイドル、白衣の天使、野球サッカー選手、警察消防士、タコイカ、ライオントラなどが続き、一番後ろのリーダーの顔は真っ赤から真っ青になっていく。

三人は七階に到達した。七階には背広姿のサラリーマンたちがベンチに座っていた。新聞を読む者、コーヒーを飲む者、サンドイッチを食べる者。休憩時間なのか、みんな、くつろいでいる。



「おい。昼休みは終わったぞ。さ、仕事だ。昼一番の仕事はまず、そいつらを捕まえることだ」

リーダーは始業時間のベルをけたたましく鳴らす。

相手の存在さえも認めようとしないように、互いにばらばらだったサラリーマンたちが急に隊列を組んで、いち、に、いち、にと声を合わせ、三人に向かってくる。先頭のサラリーマンはどこかで見た顔だ。

「あれ、洋介君じゃない？」

優子ちゃんが洋介の脇腹を肘でつつく。

「ええ、俺なの？あんまり自分のこと見ないから、よくわからないよ」

洋介は右手の人差し指で、自分の髪で鳴門の渦潮を作っている。

「洋介の夢が形になっているんだよ」

健太が学者のように解析する。

「俺の夢がサラリーマンなの？そうだったかなあ」

不満そうに首をひねる洋介。

「でも、すごい数のサラリーマンねえ。アイドルよりも多いわ」

優子ちゃんは残念そうな顔をする。

「みんなの夢は、サラリーマンになることなのかなあ。その代表が俺なのか」

「それ自慢しているの？」

優子ちゃんは口を尖らしている。

「微妙」

洋介は目も鼻も口も、中心部に集めるように顔をしかめる。

「それよりもこのままだと、サラリーマンたちに捕まってしまうよ。何しろ、数が多すぎる」

目でサラリーマンの人員を捉えていた健太が、数えるのを諦めたかの、厳しい顔をした。

「そうよ。さっきのアイドルたちとは比較にならない数だわ」

成すすべも思いつかないのか、優子ちゃんは座り込んだ。

「大丈夫。俺に任せて」

胸を叩きながら、洋介はポケットから鈴を取り出すと、火事だ、火事だと叫ばんばかりに振りだした。

「さあ、勤務時間は終わったよ。みんな、家に帰らないと」

鈴の音と洋介の声を聞くと、サラリーマンたちはカバンを手にして、それぞれの別の方向に散って行く。洋介たちの周りには、あつと言う間に誰一人としていなくなった。

「さあ、急ごう」

今度は、洋介が先頭を走る。その後を健太と優子ちゃんが続く。

「洋介君、やるじゃない」

優子ちゃんが洋介の背中を指で突く。

「たまにはね。サラリーマンの気持ちがよくわかるんだ。仕事が終われば急いで家に帰るのさ。子育てや夕食の準備で忙しいんだ。だって、うちのパパがそうだから」

振り返った洋介の顔が照れていた。

「本当に、役に立たない奴らだ。うちはブラック企業じゃないぞ。今から、時間外勤務手当を出すので、あいつらを捕まえろ」

リーダーも洋介に負けまいと強く鈴を鳴らすと、その音に呼応して、サラリーマンたちは再び集まり、隊列を組むと、三人を追いかけて始めた。

「仲間のむにゃむにゃを働かすだけ働かして」

「自分の言う通りに働かなければ、吸いこんでしまうんでしょ」

「ブラック企業そのものじゃないか」

三人はリーダーのやり方に憤りを感じる。

健太たちの後ろには、サラリーマン、アイドル、白衣の天使、野球サッカー選手、警察消防士、タコイカ、ライオントラなどが続き、一番後ろにはリーダーが控えていた。だが、リーダーの顔はあきらめの境地なのか、真っ青から真っ白に戻っていた。

三人は七階に到達するものの、そこはがらんどろで、誰もいず、何もなかった。

「七階には敵はいないんだ」

「まだ、子どもたちの夢が集められていないだけじゃないかな」

「ここが誰かで、何かで、いっぱいになったら、本当に、あたしたち子どもに未来はなくなるわ」

健太はフロアーに佇み、広い空間を黙ったまま凝視する。洋介と優子ちゃんは健太の両隣りに立つ。

「待て、待て」

下の階から、リーダーたちの声が聞こえる。

「ぐずぐずしてられないぞ」

三人は更に階段を登り続ける。だけど、これまで、あまりにも走り続けたので、吐く息と吸う息を間違えるほど、息は絶え絶えだ。そして、らせん階段の向こうは白い壁で塞がれていた。

「行き止まりよ」

「もうだめだ」

優子ちゃんと洋介は後ろを振り返る。後ろから、リーダーたちが「ここまでだ」と笑みを浮かべながら三人に迫って来ている。